

1920年代の学校における身体教育の改革構想，学校体育強化のための
改革努力および体育教師養成の問題について
— 『改革教育運動当時の学校における身体教育』より—

菅井京子¹⁾

Eine Übersetzung von “ Die Körpererziehung in der Schule
zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung ”

Kyoko SUGAI

Das Resumee

Der Zweck der Forschung ist es, eine Hilfe zum Nachdenken über die Gymnastikbewegung in der reformpädagogischen Bewegung zu ergründen.

Dafür versuche ich eine Übersetzung des zweiten Teils des Kapitels “ Didaktische Reformkonzeptionen der körperlichen Erziehung in den Schulen der zwanziger Jahre ”, des dritten Teils des Kapitels “ Reformbestrebungen zur Intensivierung der schulischen Leibesübungen ” und des vierten Teils des Kapitels “ Reformprobleme der Turnlehrerausbildung ” aus der Einleitung zu Alfred Geißlers “ Die Körpererziehung in der Schule zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung ”.

Key words : Gymnastikbewegung, Körpererziehung, Reformpädagogik

1) スポーツ開発・支援センター（大阪成蹊学園教育研究所）

はじめに

体操改革運動を体育改革運動の立場から捉える一助として、今回は、大阪成蹊女子短期大学紀要および大阪成蹊短期大学紀要投稿に引き続き、アルフレッド・ガイスラー著『改革教育運動当時の学校における身体教育』（Alfred Geißler, Die Körpererziehung in der Schule zur Zeit der reformpädagogischen Bewegung, Kastellaun/Hunsrück: Henn, 1978.）より、「2章、20年代の学校における身体教育の改革構想」の中の「5節 小学校体育の構想、6節 田園学校の体育構想、7節 水泳授業の構想」、「3章、学校体育強化のための改革努力」の「1節 日々の体育授業の問題、2節 特殊体育の問題、3節 帝国青少年競技の問題、4節 体育服の問題」、「4章、体育教師養成の問題」の「1節 体育教師養成の多種多様性について、2節 体育教師養成の改革について」および「終章」の翻訳を試みた。

本書『改革教育運動当時の学校における身体教育』の全体の内容については次の通りである。

序章：世紀の移行期における教育批判について

1章：今世紀への移行期以後の学校における身体教育の改革

- 1節 体操
- 2節 遊戯奨励運動
- 3節 スポーツ奨励運動
- 4節 体操改革運動
- 5節 青年運動
- 6節 労作学校運動
- 7節 田園教育舎および学校田園舎運動
- 8節 音楽教育
- 9節 帝国学校会議

2章：20年代の学校における身体教育の改革構想

- 1節 エッカルトの構想
- 2節 ガウルホファーとシュトライヒャー

のオーストリア構想

- 3節 ノイエンドルフの構想
- 4節 ハルテの構想
- 5節 小学校体育の構想
- 6節 田園学校の体育構想
- 7節 水泳授業の構想

3章：学校体育強化のための改革努力

- 1節 日々の体育授業の問題
- 2節 特殊体育の問題
- 3節 帝国青少年競技の問題
- 4節 体育服の問題

4章：体育教師養成の問題

- 1節 体育教師養成の多種多様性について
- 2節 体育教師養成の改革について

終章

また、前回までの翻訳の状況は、次の通りである。

序章：大阪成蹊女子短期大学研究紀要No31, 1994.

1章：同研究紀要No31

- 1節 同研究紀要No31
- 2節 同研究紀要No33, 1996.
- 3節 同研究紀要No33
- 4節 同研究紀要No35, 1998.
- 5節 同研究紀要No39, 2002.
- 6節 同研究紀要No40, 2003.
- 7節 同研究紀要No40
- 8節 同研究紀要No40
- 9節 同研究紀要No40

2章：大阪成蹊短期大学研究紀要創刊号2004.

- 1節 同研究紀要創刊号
- 2節 同研究紀要創刊号
- 3節 同研究紀要創刊号
- 4節 同研究紀要創刊号
- 5節 (今回)
- 6節 (今回)
- 7節 (今回)

3章：(今回)

- 1節 (今回)
- 2節 (今回)
- 3節 (今回)

4 節 (今回)

4 章 : (今回)

1 節 (今回)

2 節 (今回)

終章 : (今回)

アルフレッド・ガイスラーは、ドイツの体育教育者で、体育教育史研究者としても、後代の研究者に大きな影響を与えたと言われている。本書の他に、“Das Bodenturnen” Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, 1937. “Springen und Schwingen - Ein Turnlehrbuch für Schulen” Limpert, 1958. や “Freudvolle Spiele für das 1.bis10. Schuljahr,; Ein Leitbild für die Spielerziehung in der Schule” Limpert, 1966. 等の実技書をも著し、理論家であるだけでなく実践家でもある。ガイスラーは本書で、体操、スポーツ、遊戯等の改革運動を含む1920年代のドイツの体育改革を広く改革教育運動の中で捉えて論述している。当時の体操教材については、ハンス・グロル著 “Systematiker der Leibesübungen” 1955. (高嶋実訳 『近代体育教育史』 1978.) に多く資料を得られるが、そこでは、改革教育との関係はみいだせない。また改革教育に関する文献、例えばヘルマン・ノール著 “Die pädagogische Bewegung in Deutschland” 1970. (平野正久・大久保智・山本雅弘訳 『ドイツの新教育運動』 1987.) 等では、体操や体育の記述はごく僅かである。ガイスラーのこの書は、体操改革運動を研究テーマとしている私にとって大変興味深く、体操改革運動を体育改革運動の立場から捉えるための重要な示唆を与えてくれるものと考えられる。

なお、訳文中の注記は、原注である。

また、末尾の体育等関係者人名リストは、訳者によるものであるが、ガイスラーの研究領域を確認するために、原文中に登場する体育や教育に関係する人物について作成したものである。

2. 20年代の学校における身体教育の改革構想について

5) 小学校体育の構想 (Die Konzeption des Grundschulturnens)

1919~1920年にワイマールでの国民議会が生み出した憲法、それによってドイツ帝国の共和制が基礎づけられたのだが、それには学校改革に関して将来のために重要な決定があった。すなわち、4年間の初等学校の導入である。どのような立場あるいは出自の子どもでも子どもはすべて義務として小学校に通わねばならない。このような新しい学校のタイプが大規模な実験的分野とされる。ベルトールト・オットー (Berthold Otto) の総合授業が公立学校で実施される公認の権利を初めて受ける。

最初の4年の学齢の間に、新しい教授法に特に関心を示す教師たちは、子どもに優しいだけでなく、優しいだけでは子どもに対してはいけないことであるのだが、子どもらしさにも、子どもが欲することや、どのように子どもに責任をもって関与させるべきかの方法にも専心する。

原則的には、担任教師がそれぞれ授業を行う。これは初め専門主義によってうち破られるが、また総合授業によって「日々の生活から」を戦略として計画される。子どもの質問意欲、子どもの瞬間の感動は、クラスと教師の間の精神的な交流の出発点である。子どもの理解と思考分野の全体性はそのまま維持されるべきである。教師と子どもは、会話、遊びや作業の共同体である。

ベルトールト・オットーは、このような関係において「自然な授業法」ということを言う。私たちは、改革教育におけるこの「自然であること」を身体的、精神的教育におけるひとつの原理に引き上げられることを見てきた。子どもの物やそれとの関係についての自主的な興味は大事にされるべきである。生命現象の求める特徴は教育過程を導く。そのた

めには教師からの動機づけを最低限にする必要がある。教師は、将来やこの時点にとって重要なことを探り出すために、それを授業的に仕組むために、ただ子どもの興味の局面に耳を澄ませる必要がある。教室、体育館や遊び場で、生きた生活を実現させるべきである。

この自然な、つまり生き生きした授業は子どもの総合的な理解に注意を払い、作業と回復あるいは遊びと作業の間のよいリズムを留意する。学ぶ喜びが達成され維持されるべきである。

すべての実験の際、教授学的、方法的に多くの恵み豊かな結果が現れた。身体的教育において、このような基本的な考えにも方向づけがなされ始める。それを総合授業における統合された学習原理とすることが試みられる。

どのような学習テーマにおいて子どもの想像力は呼び起こされるのか、「消防隊」あるいは「鉄道」あるいは「森」等々の運動課題は実現される。総合授業の教授法は、生物学的、生理学的そして教育心理学的に方向づけられている。「人間は、その遺伝的素質と一生の間に影響を受ける環境要因の産物である。謎に満ちた自然が人間に素質や力を、その人生行路において何を与えるものかということは、私たちが指し示すことはできない。私たち人間にはその素質を発達させるための、身体的あるいは精神的・心的であれ可能な限り有利に形成してくれるであろうような可能性と環境だけが残る。遺伝的素質の範囲を越えてはどのような発達の可能性もない。」¹⁵¹⁾

身体的成長の素質は、運動によって最適に有利に影響を受けうる。すでに小学校の新入生では座位強要によってその成長は脅かされる。小学校における授業は計画的に考慮されたものでなければならない。子どもの運動欲求は満たされなければならないし、運動の自由は認められなければならない。けれども「静寂と秩序、沈黙と集中」¹⁵²⁾は達成されるべき授

業の条件である。

どのような運動内容が、総合授業において展開されるのか。それは授業テーマによる。「初学者は彼の周囲の人々を観察した・・・」

「彼は彼の周囲の出来事に強い関心を示した。」・・・「出来事、人間そして動物は、子どもの内的関心を伴う体育授業においてそれらすべてを遊戯的にもう一度生き生きとさせ、それらの行為や動きの模倣から子どもの身体の学習のための第一番目の土台を築くような、機会を提供する。そのようにして、体育教材は子どもの生活や彼らの思考世界からくみ取られ、身体教育、特に最初の学齢の2年間での身体教育は科学的授業の中へ組み入れられ、ひとつに統合される。」¹⁵³⁾

総合授業については、ここにその限界もまた設定される。子どもの想像力によって育まれるような模倣運動、再現運動、歌芝居は、最初の2年間の学齢にとって重要である。このような早い時期の認識は、専門的でない統一テーマをすでに疑問的に捉える。有能な教師によってしっかりお膳立てられ子どもたちに効果的にもたらされるような、しかし大抵は奇妙で真剣さが少ない特徴をもった、いわゆる「運動物語」において、学齢の最初と次の年にとってすら、テーマの教授学的な疑わしさがはっきりと明らかになる。

キンダーマン (Kindermann) とリリー (Lilie) は、このような困った状態を認め、ノイエンドルフの教授学の基礎の上に立つ。「小学生の体育と体育授業も身体修練と技能運動を含んでいるべきであり、しかしその両方を段階的に切り離すことなく、互いに流れ込ませ交代させるように、そしていつも子どもにも意識されることなくである。」¹⁵⁴⁾

キンダーマンとリリーの独特なことは、彼らは彼らの運動物語の際に、運動行為の経過において身体修練と技能運動の原理を統合するという点にある。すなわち各々運動物語に身体修練や技能運動の基礎になるような模倣や再現運動を含むのである。

身体修練の基礎運動には，例えば体の前後屈，体の回旋，体の横まげ，呼吸運動，平衡運動，解緊運動等々の運動が挙げられる。

技能運動には，走る，跳ぶ，はねる，投げる，引く，押す，よじ登る，登る，ぶら下がる等々の運動が提示される。

ガウルホーファーとシュトライチャーは，彼らの『子どもの体育』において，1・2・3・4年生の授業挿絵で彼らの初等教育体育の考え方についての印象的なイメージを与える。

他の見解もある。すなわち「子どもから」，子どもの遊ぶ能力からそして子どもの想像力や表現力からも出発することができるというものである。根本的な相違は，運動的，協同的，リズム的，想像力刺激的，賭をめぐって競うような競争的，そして技能的観点より，授業の中にテーマ化されて現れるような「生活様式」の多様性の中にある。もちろん，生物学的戦略は体育授業構想に内在している。

キンダーマンとリリーの見解では，テーマ的行為が演劇論へと教授学的に集中されていくのだが，その彼らの見解に対照的に，ガウルホーファーとシュトライチャーの見解では，生物学的，運動学的，そして教育的目的をもって行為は自然な運動の体系の中へ向けられる。要約的に私たちは次のように言うてよいであろう。初等学校体育において，学校への移行期に子どもに彼の自分自身の馴染みのある環境をできるだけ長く保持するという意図が追求される。このことによって，子どもの器官に関わる発達が阻害されることなく進められうる。環境や人間関係を教授学的，方法学的に点検し，世話することによって体育の実現は子どもに正しい試みとして残る。

6) 田園学校の体育構想 (Die Konzeption des Landschulturnens)

学校における体育の普及に伴い，特に田園学校において，とりわけ，ひとクラス体制の少数で組織される施設では新しい教授学的問

題が生じる。このような学校においては，大抵ひとつあるいは複数の年齢区分の少数クラスにすべての年齢区分を統合する。

このような状況は，教師たちに日々新たに解決されるべき課題を提出する。授業では計画と即興が頻繁に交代する。成長に委ねると導くという方法論とが，教師に国家利益や村の目標において動機づけをするよう呼びかける。

教師は，彼が組織の支配的な措置によってリードし修正せねばならないような不確かな教育課題の演出家，監督，そしてプログラマーである。

村の教師は，村の医師や村の牧師と同様，共同体の中心人物に含まれる。彼は，他の者と同様に，独自の責任において，ただし経済的には強く共同体に従属しているのであるが，彼の役割を果たす。大抵財政上のものであるこのような従属が，授業課題の実行について考える切っ掛けとなる。なぜならば授業の具体的な手本があるわけではないからである。田舎の教師は，すべての授業領域において教えなければならないのだが，同時に創造性が望まれるので，彼は，教える気力，活発さ，方法学的な勘や理念的責務を求められるような状況の中にある。

すべての授業領域において，彼は彼の能力を発達させ育成しなければならない。体育授業において彼は自然にそれを発揮するのである。なぜなら，あらゆる学年の子どもたちは，すばやく遊びによって動機づけられ，また自然な環境によってまさしく元気に走り回るよう誘われるのであるからである。

体育教師としての彼の働きにおいて，田舎の教師は町の学校の専門教師よりある点で優れている。その点とは，彼の体育授業が天気に左右され時間的に柔軟に組織されるときに，それだから彼が授業を行うという機能ではなく，学校や社会的機能を多く果たすということにおいてである。

その際，田園学校における体育の授業は原

則的に特別な機能をもっているのだと言われるべきではない。教育の使命は、町の学校におけるのと同じであるが、しかし、田舎の学校体育のその「外観」はやはり違っている。

そのことによって私たちは主要な問題を話題にした。改革教育運動の内に起こる田園学校運動には、その運動の代表者として最初にフリードリッヒ・パウルゼン（Friedrich Paulsen）、次にベルトールト・オットー、ディーツ（Dietz）、カーデ（Kade）、そしてカウフマン（Kaufmann）の名が挙げられねばならないのだが、この運動はもはや都市学校をコピーするのではない田園学校を創ろうとする目標を追求する。「それは今日の課題であるのだが 内部的な独自の法や権利から小学校の独自の生活形態の発展に従事せねばならない。始まりかけている小学校の内的、外的形態変化は、田園学校を独自の形態へも導く。とりわけその変化が土着性や生活に身近なことの原理によって決められる場合にである。」¹⁵⁵⁾

村独特の学校は、「その陶冶や教育の仕事を村社会の仕事と生活の中に編み込まねばならない。」田園学校の改革はただ教授学的、方法学的あるいは組織的改革であるはずはない。すなわちそれは「教師たちの心映えの問題」である。彼らは「田園学校を地域社会の文化的中心点」にせねばならないのである。「これは陶冶内容の改変や拡大を意味する。すなわち本源的な専門分離の因習的な学校の科目の克服である。」¹⁵⁶⁾

総合授業や講習こそが将来において田園学校の内的、外的構造の特色となる。「保護者と公衆の教育を通して」・・・学校は村地域社会に有機的に組み入れられねばならない。

農民たちが牧草地と役に立つ器具一式を体育授業に自由に使えるようにしたことによって、部屋の貸し主がそれどころか集会室も貸してくれたことによって、20年代においては田舎の教師たちが保護者と地域社会の動員によって、身体教育のためにまさに肥えた土地

を用意することに成功したということに疑問の余地がない。

子どもたちは新鮮な空気と農場での運動を充分にもてたはずであったのに、多くの親たちはそれを妨げる先入観をもっていた。多くの教師たちは、その先入観を取り崩すことに成功し、彼らは動機づけの才能をもつ、手際のよいそして着想豊かな即興者であることが証明される。しばしば教師たちは、スポーツクラブ設立の発起人である。この20年代はインフレーションの後であったが、それどころか村々にはスポーツクラブが設立され、スポーツクラブ設立の年代と呼ぶことができる。プロイセンの体育大学から体育の普及と強化のための強い刺激が町へそして村へと発信された。この大学のすべての卒業生は、公務員の教師で、専門体育教師試験を受けるために、体育の1年間の研修に参加する。田園学校教師の参加者数は大変多く、田舎での体育授業が継続教育講習参加を促す。田舎の生活環境のもとで、体育授業の意味ある実施の困難さは大部分克服される。

1921年の指導要綱では、体育は「原則的に屋外で」行われるべきであるとされる。田園学校では、他の可能性はほとんどない。運動場については、「自然の風景、森、牧草地、掘り割りなど、人工の場所（スポーツ場、校庭）、閉鎖空間（納屋、打穀場、集会室、クラスルーム）」が考えられる。道具類については、自主製作の小さいボール、メディシンボール、シュロイダーバル（擲球）、インディアンクラブ、砂袋、縄跳びなど これはメスター（Mester）の提案のことであるが 梯子、干し草用荷車、轆が使用される。これについてブローヤー（Breuer）も同じ意見である。¹⁵⁷⁾ 器具を用いない体育のために、走る、はねる、跳ぶ、相手を引くと押す、相手をもち上げる、運ぶ、および駆けっこなどの内容が挙げられる。

運動内容の授業構想に関しては、ノイエンドルフの構想が実現化される。技能運動が中

心に置かれ、遊戯と同じくらいに跳ね回ることが大きな領域を占める。しかし、身体修練もまた姿勢異常の補償のために重要視される。

1920年に導入された帝国青少年競技は、町と同様田舎でも体育が楽しい学校生活における本質的な役割を得るのに貢献する。それはただ単に競技でなくて、祭りとしての体育的、スポーツ的生活様式である。

7) 水泳授業の構想 (Die Konzeption des Schwimmunterrichts)

「自然な運動」によって体育授業を組み立てようという教授学的な見解はフリッツ・エッカルトの最初の努力以来、当時の体育教師の心をつかむ。

水泳と水泳授業も新たに細部まで検討される。クルト・ヴィースナー (Kurt Wießner) によって水泳授業は泳げることを目指して構想が練られる。泳げない人は、未知の要素と親しくなる行為として、それと出会うことを経験するべきである。

ヴィースナーは、このような教授学的、方法的ステップを「水慣れ」と呼ぶ。水は人間にとって太古より生活要素のひとつである。食のための、体を洗い養生するための、潜るときの、また木材や船等々のような補助手段は別として、その中を移動するときの生活要素である。

多くの動物は生まれつき泳ぐことができるが、人間はこのような持参金を全くもたない。しかし人間には学ぶ能力があり、水を完全に「友だち」にすることを学ぶことができる。

水泳教育は、それについてはここでは述べられないが、畏敬の念を起こさせる古い歴史をもつ。水泳を習得するという願いについては、昔から計画的学習過程に余りにも多く理性が関与させられてきた。水死の恐怖は水泳教育に強く影を投げかけた。

ヴィースナーは、初心者の授業を浅い水で、上達に応じて深い水へ移していくことによ

て、心理的なこの心配のギアを彼の画期的な教授法に切り替える。その要素の快、不快に慣れることは、彼の自然水泳のための基礎である。

水泳講習の個々の授業において、陸上練習、竿に繋がったの練習、竿で安全を確保しての水泳というこれまで通例の方法は、彼によって拒絶される。

すでに改良されたケーテ・ドムベルノウスキー (Käthe Dombernowski) の補助具としてのスイムコルクやスイム筒 (すでにグーツ・ムーツでのと同じく) が使用されているのだが、集団水泳授業の教授法も廃される。この水泳の教授学的思考は、水という要素の中での人間的行為に専心する。つまり、それが水泳という前進運動に導くような独特の活動の順応過程に専心するのである。

水泳授業の例で、いかに多く非常に教育的、陶冶的な考え方が人間学的に向かうか、いかに多く環境的存在として人間がみられるか、いかに多く人間は環境と一致して生き、それと折り合い関わり合わねばならないかがもう一度明らかになる。{60年代にヘリベルト・ハインリッヒ (Heribert Heinrich) は「教授法の問題点」において水泳を環境の一部との原初的接触として叙述した。}

ただ単に合理性ではなく、人間の感情や感受性も水との出会い行為の際に呼びかけられる。運動経過から組み立てられる古い純粋な方法や水を抽象する分析的、統合的方法は、伝達効果つまり学習成果が問題視され拒絶される。人は水泳を水の中で経験することによって、浮力の体験によってのみ学ぶ、すなわち、水の特性と「不慣れな」要素と適合することを見積もり、感じることを学ぶのである。そのことを水泳教師たちは悟る。

学校の水泳授業に指定されている水泳の「自然教授法」は、このような認識の土台の上に発展した。今日なお、しかしさらに細分化されているが行われている。

この新しい水泳講習は、従って次のような

授業ステップを明示する。

1. 水慣れ運動(生活や遊戯形態; 学校形態)
2. 滑る運動(生活や遊戯形態; 学校形態)
3. 脚の運動
初心者水泳法としての平泳ぎ; 学校形態
4. 腕の運動
5. 泳ぐ試み(浮き袋をもったものも; 生活と遊戯形態)
6. 浮き具なしで泳ぐ(確実に泳ぐ)
7. 他の泳法を学ぶ

このような授業は、労作学校の考え方で実行される。「取り扱われる課題によって刺激を受けた生徒たちが可能な限り自身でその都度扱われるべき領域の範囲内で適合するような運動を見つけるといことは、労作授業の関心事である。」(引用不明)

3. 学校体育強化のための改革運動

1) 日々の体育授業の問題(Das Problem der täglichen Turnstunde)

学校における日々のスポーツ授業の今日まで未解決の問題は、過去においてすでに多く検討されたひとつの要求である。20年代において、そのような刷新の実行のための最初の試みは行われる。

関連して次のような実行が学校で日々の体育を獲得するために粘り強く行われた努力の足跡を残す。著者はキンダーマンによって雑誌「体育」1926年、320 - 325ページに挙げられた事実に従う。

グーツ・ムーツは、シュネッペンタールの汎愛学校において日々の体育を実行し、全学期にわたり全学校のためにそれを要求し、個々の成人は最低1時間日々の体操を行いたいものだという願いを表明した。

1882年、シュトラスブルク大学の二・三の医師がアルザス・ロレーヌ地方の高等教育施設で週に6時間の体育の実施のために力を尽くす。

1890年の学校会議開会の際、皇帝ヴィルヘルム2世は言う。「銘々の健康である教師は、

体育ができねばならない、そして毎日体育をすべきである。」と。これは、生徒たちがこのような果たすべき義務をもっていることも意味する。日々の体育授業の導入の要求はますます切迫していく。

1910年6月13日のプロイセン文部大臣の布告において、学校での日々の10分間体育の通達が出される。このような切っ掛けも教師陣に何の反響もなく、色褪せる。

1912年アリス・プロフェ(Alice Profe)によって、すべての女学校において 州立と市立学校で 体育3時間と午後に必修の遊戯1時間を週ごとに実施するという新しい考え方が打ち出される。

1913年、博士であり教授であるグルーパー(V. Gruber)は、日々の身体活動が日々の精神活動と同じように必要不可欠であると表明する。

1914年、シュピッツィ(Spitzzy)医師は、ただ単に日々の体育授業が実施されるべきなのではなく、身体教育の精神から全体の学校授業が行われるべきであると説明する。

1915年、ヒュッペ(Hueppe)教授は、精神労働者にとって日々の体育はその責務の最低限のものであると述べる。

シュテフェン・リュベック(Steffen-Lübeck)教授は、高等教育施設のために3時間の午後の遊戯を含む週に6時間の体育を提案する。1918年、体育のためのドイツ帝国委員会が、その考えを取り上げる。精神的教育に対する釣り合いとなるものとして、週に6時間の体育の導入のためにドイツ全州にその指導原理を発する。1918年、プロイセンの体育教師協会は、その内2時間は午後の遊戯として構成されるべき週6時間の体育を学校へ男女ともに導入する政府の認可を待ち受ける。

1919年、ワイマールにおける憲法制定の国民会議の際、体育のためのドイツ帝国委員会(DRA)は、学校における体育の時間を週6時間へ増加する要求を提出する。

1920年，身体教育者たちは，帝国学校会議に際して同様に日々の体育授業を求める要求を提出する。

エドムント・ノイエンドルフは，この考えを再三活発化させる。彼と並んでマルティン（Martin）教授もまた医者たちや多くの教育者たちもである。

エーリッヒ・ハルテは，日々の体育授業の導入を許さない道理に適った理由はない，それゆえ，実施法の制定がされねばならないと考えた。

学者団体が試験的導入に力を尽くす。ノイエンドルフは，彼が校長を務めるルールミュールハイムにある彼の施設で日々の体育授業を行う許可を受ける。しかし彼は市庁や彼の全教職員やウェストファーレンのフランス占領軍局の前に降伏せねばならない。

1922年5月15日から8月5日まで，ラーティンゲンのある学校の二つの少年クラスと二つの少女クラスで日々の体育の実施における短期間の試みが企てられるが，しかしこれも反響がなかった。1922年の終わりについてハレのヴァインガルテン校の校長であるキンダーマンは，文部省へ日々の体育授業の実現のための許可を受けるために陳情に向く決心をする。彼は大臣に三つの催しうる提案を提示し，医師や学校官庁の権威の所見を添える。それは，教授であり博士のアブダーハルデン（Abderhalden），以下同じくビヤ（Bier），ブレンケ（Blenke），コールラウシュ（Kohlrusch），ミュラー（Müller），F.A.シュミット（Schmidt），ドリガルスキー（Drigalski），および博士であるルコウ（Luckow），以下同じくシュネル（Schnell），ティーレ（Thiele），モクヴィツ（Mogwitz）のものである。1923年には，マティアス（Mathias）教授とディーム（Diem）博士が『日々の体育授業』という小論文を出版する。両著者は，健康政策の状況と批判に値する教育方法を指摘し，日々の体育授業がもはや回避されるべきではないと考える。

プロイセンとシュレスヴィヒ・ホルシュタインの体育教師協会は，この同じ年に公衆に訴え，教員養成施設での週6時間の体育の速やかな採用を要求する。1924年5月の体育教育のためのドイツ会議の際，その参加者たちは，州の授業管理行政が日々の体育授業の目標を計画的に効果的に取り扱うことを厳しく要求する。この会議は成果があった。

キンダーマン学長やエドムント・ノイエンドルフは，日々の体育授業実施のための試みを始めることを許される。それだけでなく，団体や連盟も動員された。

1924年，ドイツの諸都市間の学校協会が「日々の体育授業，週ごとの午後に行われる遊戯，月ごとの遠足，帝国遊び場法そして体育のための市職員の設置」に賛成を表明する。

プロイセン市議会の主要委員会は，「1日1時間の必修体育が予定されることが最低限とみなす。」世間の状況も日々の体育の整備を急ぎ立てる。1924年のヴュルツブルクでのドイツ体育会議（DT），バイエルンの州体育諮問委員会，陸上競技スポーツ省，スポーツ医学協会，ザクセンとシュレージエンの体育教師協会そして政党，ドイツ国民民族党（DNVP），ドイツ民族党（DVP），ドイツ民族の自由党，ドイツ民主党，中央党そして社会民主党等々である。

1925年，ベルリンでの「婦人の身体教育のための会議」の際は，日々の身体運動に注意が促される。

ドイツ労働者体育・スポーツ連盟も同様に日々の体育授業の導入による身体教育の改善を呼びかける。

1925年，ドイツ帝国体育委員は再度日々の体育授業を帝国政府に要求する。

この同じ年にケルンの14クラス編成の小学校で日々の体育授業が導入される。

1926年，他のすべてのケルンの学校でもこのような企てが広がりを見せたようだ。

1926年の復活祭以来，ルイーゼ学校，南部の男女共学学校および養護学校，ハレの全学

校では、日々の運動授業が実施される。

ベルリン・シェネベルクやテンペルホーフでは、試みが企てられたという。学長キングダーマンは日々の体育授業導入の促進者、成功した教育者として功績をあげた。

プロイセンのすべての学校では少なくとも午前中の2時間の体育と並んで午後の遊戯が実現された。

3時間の体育授業をめぐる努力はさらに進み、そして国民社会主義（ナチズム）の時代に初めて肯定的に決定される。

日々の体育授業の実現化は、その要求の初めから解決の難しい問題であることは明らかであった。全寮制学校と通いの学校において、それは（日々の体育授業の実現化は）常に実行できるものであった。公立学校においてそれは整えられ得る。証拠は十分にある。

教員の採用が決定的に重要である。時間割は体育のために授業時間短縮によって様変わりするであろう。

このような企てを始めたその学校は褒めちぎられる。ただし次のような前提（条件）が与えられねばならないのであるが。

1. 体育授業に適した十分な教師。州体育施設はその低下しないであろう需要を賄わねばならないであろう。
2. それぞれの学校のために少なくともひとつの遊戯緑地があらねばならないであろう。なにしろ体育は指導要綱によれば戸外で行われるべきである。
3. それぞれの学校はある程度の運動器械をもっているべきであろう。

日々の体育授業は20年代においても夢であったと言ってもいいであろう。30年代にそれは現実となる。第二次世界大戦後それはまた得ようと努められる。今日、高技能スポーツにおいても日々のトレーニング時間がある、そして確かにトリム運動の範囲で日々の運動課題をこなす一般スポーツ人口も少なくなっている。

2) 特殊体育の問題 (Das Problem des Sonderturnens)

世紀の変わり目以後、医師団は学校における体育の改革に具体的に協力する。特に次のような名前を挙げることができる。シュミット (F. A. Schmidt), オイゲン・マチアス (Eugen Matthias), ヴァルター・シュネル (Walter Schnell), デェトレフ・ノイマン・ノイローデ (Detleff Neumann-Neurode), クラップ (Klapp), シュビツィ, コールラウシュ等々 彼らはすべて医学的研究によって改革提案を支えることに貢献した。

彼らを最初のスポーツ医師とみなすことができる。そして彼らの一部は、今日学校特殊体育という概念のもとにある学校における整形外科的体育の創始者である。

医師団は、青少年の粗悪な健康状態と姿勢の欠陥について訴える。

この整形外科的學校体育は予防的な、また治療的な特性をもつ。それは健康や姿勢の虚弱な子どもたちのための課題をもった特殊体育である。

身体教育は、同時に、精神的、心的教育である。つまり総合教育であるということが明らかになる。F. A. シュミットの『私たちの身体』という本で彼は当時公衆に説明することができるかと考える。

この整形外科的學校体育、これは基本的に毎日行われるべきなのだが、この20年代において大変まじめに受け取られ、實際学校の体育教師を志願する者は整形外科的學校体育の養成が証明されねばならなかった。

概念規定をめくって整形外科的學校体育あるいは予防体育について意見の相違が生まれる。ピア教授は、整形外科的体育は医師の関心事であると考え。なぜならすべての姿勢損傷は、くる病とその後遺症に起因するのであるとしてである。このくる病を防ぐ助けをするような予防体育は医師の主要な仕事である。それは光と空気の影響、適切な栄養、姿勢運動と遊戯、適切な衣服そして衛生法を

内容とするのであるからである。

ビアーは、そのうえさらに、ある所見において次のように述べる。「身体の健康維持、増進のための基本条件に順応しなかったこれほどよい教師が、正しく前進することができるということは、これまで一度もその試しがない。純粋な教師は常に型にはめられ単純化される。」¹⁵⁸⁾

ビアーはこのような公表をもって教師たちを不可解な方法で貶す。ガレノス (Galenos) の証言を思い出すとき操家 (医師) による古代ギリシャのパイドトゥリベース (Pädotrieben) の差別待遇を思い出させる。

改革時代の体育教師たちは、自分たちの活動分野に全く新しく植林する、そして彼らは素質に応じて優れた整形外科的教師である。今日の治療操家のようにである。彼らは助言者としての学校医の価値を認める。

体育教師はまず背筋運動 (はねぶた匍匐運動) を教えることができる。これらの特殊な整形外科の姿勢矯正的な体育運動と新たな予防的な体育運動とを統合することができる。

大事なことは学校体育を整形外科的にも選別することである。マルガレーテ・シュトライヒャーは1926年に次のように言う。「体育の整形外科的改良は一度到達されそして次にいつまでも続く状態である。その改良は継続的に研究されねばならない、それも医師と体育教師の共同である。」

学校における実践については、また次のようであった。医師によって特殊体育のために選出された子どもたちは特殊クラスにおいて性別に組み分けされる。このような授業は上半身裸で、それによって教える者はよく点検ができる。

「この特殊体育は一般体育より高い教育的価値をもつべきである。しかし教育は全人についての仕事であり、ただ単に筋肉あるいは骨格のような器官に関するものではない。各々は自分の場所で個人の要求に応じて力を振り絞られねばならない。だから私たちは合

理的な姿勢を求め、また筋肉を強くする運動をするだろう。また呼吸運動も慎重に運動計画に組み入れられる・・・しかしやはり何よりもまず子どもの心を理解することが大切である。」¹⁶⁰⁾

3) 帝国青少年競技の問題 (Das Problem der Reichsjugendwettkämpfe)

学校における体育の改革範囲において、帝国青少年競技はひとつの重要な役割を果たした。少なくともそれは体育をそれに相応しい社会的地位に高く引き上げるために貢献した。

体育は帝国の祝祭の行事より以上の注目を達成する。というのは、生じつつある「身体文化」の複数の現象の中で、体育のもつ健康政策的、教育的次元が明らかにされる。

1919年に体育の帝国委員会はカール・ディーム (Carl Diem) によって青少年男女の競技のために活気づけられる。これは1920年に「帝国青少年競技」と名づけられる。

体育の改革、これは根本的には社会の考え方や意識の改革であり、具体的には細分化された現象においてではあっても意志と努力を具現するものである。学校の門を通るその道はただゆっくりしか見いだされない。二元論的思考のフィルターは 教育の学問性と貫徹力にもかかわらず まだごく少くしか変更の可能性をもたない。

帝国青少年競技は、差し当たり、帝国委員会において統合された体育連盟などの団体の試みにとどまる。

1920年の初回到陸上競技の三種競技と並んで青少年のために六種、少女のためには四種競技が公募される。その勝利者は帝国委員会の賞状を得る。

それは次に郡で最終的には州と国で実施されるように、まず予選として市町村で催されるというように企画運営される。その後ろには当然エリートスポーツ意識があり、青少年の優れた能力の発見が意図される。

年ごとにその参加者数が、それは年ごとの行事であるのだが、増加するのだから、学校省は、はっきり事態を認めるようになる。体育の最も重要な点に関して、省は時代遅れといわれるのを好まない。

1923年にプロイセンとバイエルンの各州の文部省はその忌避的な考え方を断念する。それに他の州も従い、1924年に帝国内務大臣は学校に参加を大急ぎで推薦した。

直ぐに参加者が何百万人にもなり、帝国青少年競技は学校の陶冶と教育分野の一部になる。帝国委員会によって計画され、設定された目標は、青少年の優勝者たちによっては、やはり達成されえない。競技は学校における真面目な作業の際に陽気で華やかな学ぶ喜びを伝えることを助けるべきである。その都度在職中の帝国大統領の署名入りの賞状が授与され、このような祝祭的行事のクライマックスになる。けれどもまた帝国青少年競技は初めからその構造的欠陥が明らかになる。それは余りに強く成績に結びついているということである。体育教師たちの教育的な見解が生まれ始めた。以前から続く体育とスポーツの間の対立がはっきりした兆候として現れる。

「いつもすべてをクラブから学校へ受け継ぐということは、よくない。私たちの学校は、その使命に忠実であらねばならない、そしてはなはだ度々独自の道を見つけ出さねばならない。全人的青少年を真の人格に教育することが最上位の目標である。帝国青少年競技の際にはそれが当てはまらない。」そうこうするうちに、多種目競技は陸上競技と体育的運動の複合競技になった。他ならぬ器械を使った体育運動は一般性において問題である。なぜならすべての学校が大きな器械設備をもたないということである。そのために州の学校は不利な状態に陥る。一度も賞状を得ることのできない人は楽しめない。そのような人の参加を高成績の原理が妨げる。

帝国青少年競技の批判は膨らむ。人々はそれを教育的方向へ修正する提案をする。ひと

りの勝利者でなくチームの勝利者、勝利者としての教育、すべての子どもたちが参加していること、「それを目指して私たちが身体に関して始める仕事は総合教育に至らねばならない、それは心と精神を身体運動の際に共鳴させねばならない。」

身体運動の共通の行事は、人の心と心を触れ合わせ、そしてそれを祭にし、喜びの共通の表現にする。

青少年の心が動き、音楽的で郷土と結びついたワンショットの場面は次のようであったであろう。「歌や教訓詩を伴う祝典が開かれ、催し物、身体修練・・・がそれに続く。次に、競技、むしろ大衆競技、自分たちで選んだクラスの演技、多くの遊戯そして自然体育そのうえ、しかしまだ何か郷土に結びつくものがそれに加わる。・・・そこにクラス自身の選択によって歌われた私たちのドイツ民謡が響く。少女たちは民踊を練習し・・・時折私たちが我が青少年でも広場や通りで見かけるような競争や民族伝承的なボールゲーム、子どもの輪舞や遊戯が行われる。」

「祝典のこのようなやり方は、次に賞状授与にも当てはまる。ヒンデンプルグ(Hindenburg)賞は何か郷土的なもの、故国的なものを持ち、それは私たちの生徒たちにも受け入れられる。」¹⁶¹⁾

4) 体育服の問題(Das Problem der Turnkleidung)

体育の強化の領域において、器官への機能的な刺激として光、空気そして太陽との接触が重要な役割を果たす。自然性が人間にとってある新しい身体感覚または身体意識の表現となる。裸であることと体操服の問題は宗教や世界観の態度を露呈するような論議の対象となる。人間の身体を、公衆にどれほど露出してよいかという決断が問題なのである。

「自然に即することは当然のことであるのかまたは問題なのかである。」¹⁶²⁾『『本当の自然』は、健全でその機能の最大限の調和にお

いて活発な自然の理想的な概念である。従ってこのような自然にあった生活態度は，問題の本質の生命維持と増進の方向で生じる。文化が宿命的に生活条件に結びついていること，そしてそれが意識的な変形によって増大し，高まること，これがすべての真の生き残る力のある文化の試金石である。いつもひとつの文化は，もしそれが余りに遠くその自然の母体から遠ざかるようであれば，没落が待ち受けている仮の文化であることが証明される。それで再三再四ルソー（Rousseau）の呼びかけが鳴り響くことになる。自然に帰れ！」¹⁶³⁾この「自然に適った生活は，自然の贈り物ではなく，ひとつの文化的課題で，私たちが好都合の場合にはより一層近づくような無限の中にある理想である。」¹⁶⁴⁾人間における自然と文化は一致するのだそうである。自然性において文化性もまたそして文化性においてある程度の自然性が編み込まれるということである。

裸であることは，ただ自然であるのではない。それは，また文化でもある。造形芸術を考えてみると，衣服を着ているということは文化の流行的表現ではない。それは，文化性を失うことなく自然の露出にも近づきうる。「裸であることは，正に知識と理性の事柄でなく・・・で，善悪のけじめの問題である・・・」¹⁶⁵⁾

改革教育は，自然性を求める幅広い努力において，自然と文化の中に生成された被造物としての人間に，この両面価値を感知する力を伝えようとするような生活改革の展開をみせる。「裸であることが，私たちに初めて身体が贈られることになる。」自分の身体とまだ一体でない人は，「どうにかまだ開墾されずにいる人である。」¹⁶⁶⁾裸体主義へ向くことは，従来の教育されていることからの離脱を意味する。「身体的な羞恥心は教育の産物である。」¹⁶⁷⁾ヘートヴィヒ・ハーゲマン（Hedwig Hageman）と多数の他の体操家たちは裸での体操に賛成を表明する。 ギム

ノス（gymnos）の語の意味に従って しかし彼らは裸であることがまだ世間一般に十分認められていないことも自覚している。それでもやはり，光，空気，水の中で，衣服をつけないことへのこのような欲求は，いかに人間が過去の過度に上品ぶった態度に囚われないことを欲しているかを指し示す。ヴァルハラ，ノイゾンランド同盟，上向きの生活のためのトロイ同盟，光の喜び同盟のような裸体スポーツ団体が生まれる。このような同盟においては，道徳的な純粋な生活形態の理想主義と並んで一部は文明の自由生活とイデオロギー的禁欲主義の生活との間の妥協の傾向も生じる。

先に述べたように学校田園舎運動や田園教育舎運動もすべてそのやり方でこの運動に含まれるのであるが，このような屋外運動は，体育やスポーツの際に体育服の改革を引き起こす。街着から端正な体育着を経て，スポーツウェア（スポーツシャツ，スポーツズボン）に至る体育服における変化は，スポーツ協会の人々と聖職者の人々の間の聞こえよがしの争いと結びつく。このような精神的な生活改革的变化はカトリック教会から猜疑的に見られる。フルダの司教会議のドイツ司教たちは，1925年に「色々な近代的な道徳の問題に対するカトリックの指導原理と指示」を出す。そこから二・三の意見をみると，「身体文化は，身体崇拜になることを決して許されず，心的文化のために障害になることも許されない。」「恥じらいや慎み深さの欠如のもとでのみあるようなものすべては，拒絶されるべきである。」「体育は性によって分けられ行われるべきであり，体育授業は体育をする人と同じ性の教師によって行われるべきである。体育服は羞恥心を損なうようなものであってはならない。体育授業の際の水着は少女と同様少年のために黙認されるべきではない。裸体運動は拒絶されるべきである。少女たちには，身体の形がどぎつく強調されるような，あるいは女性的特性に合わない

いような体育服を認めるべきではない。少女の体育は非公開の体育館、あるいは広場で実施されるべきである。」¹⁶⁸⁾ 同じような実践上の意見が水浴や水泳にも、より強い調子で主張される。

このようにしてカトリック教会は、当時心の健康についての懸念から人間を内的抑圧から肉体と精神的健全化の恵みへと解放する健康路線を妨げようとする。

ボンの市長と大学の学長は、体育ズボンあるいは水泳ズボンのみでスポーツをしないように指示し、学生たちは大学のスポーツ場で、中庭の芝生で、そして専門学校の「レーヌス」漕艇クラブの艇庫の中で指導されることになる。

適切な実用的な体育服の問題はまた人の心も動かす。体育服は教会の道徳あるいは社会的な生活態度の側から決定されるべきであるのか？

エドムント・ノイエンドルフは、それについて次のような意見である。自分の体育服を着る若い人はそれで日常生活を送る。「考える、感じるそして意志するようなある新しい力が彼の上に働く。」「大事なものは、私があるものをもって、あるいはそんな中で体育をするその志操や気分である。それらは、私を日常生活や文明から救い出し、私を自然な土の人間にするであろう。そのために、私たちが着るような簡単な体育服が本質的に役立つ。」心は「自然にできるだけ密に順応することを切望する。」¹⁶⁹⁾

1924年8月5日、ベルリンの州学校教職員団(PSK)の指示は学校体育服の問題における決断に強い光を当てる。このような指示における決定的な点は、少年は短い体育ズボンだけで上半身裸で体育をするべきであるという点である。根拠としては、光、空気そして太陽は機能を向上させると言われた。身体の損傷が目に見えるようになり克服される。体育服は洗濯もより安く、より簡単にできる。

父兄たちの一部は、その習慣から打撃を受け、あるいは厳しくカトリック的に生きているから否定的に反応する。

ベルリン州学校教職員団の指示は、学校における体育服の変化のための道標を設置した。父兄は論証をもって納得させられる。少女の体育服は、ニッカーポッカーや体操用ズボンから、より短い体操用ズボンやトリコット製品に変化する。男性の水着は、水泳ズボンになり、女性のそれは黒のトリコット製品になる。体操服のこのような変化に際し、医師たちはわかりやすい方法で重要な思想的、試行的貢献を果たした。

20年代は、新しい身体感覚や意識に、自然に合ったスポーツウェアを割り当てるのに貢献する。このようなより適切な、より美しい、そしてより健康的な服は、体育のゆるぎない強化を可能にする。

4. 体育教師養成の改革問題

教育形態が変化するこのような時代において、改革過程における教師養成もまた変化する。改革思想や改革提案が広がる前に、体育教職のための養成の状況が公開されねばならない。

1) 体育教師養成の多種多様性について

(Zur Verschiedenheit der Turnlehrer-ausbildung)

第一次世界大戦前、ドイツ帝国はひとつの国家連合であった。各々の国は、その文化統治権をもち、その都度それを領主館やそれぞれの国会が監視する。そして帝国政府は皇帝と帝国議会とともに意志の方向を調整する努力をする。

世紀の変わり目以後、身体教育の構造が教育一般のそれと同じように問題にされる。すべての精神的議論、思考の覚醒や大変革は新しい思潮へ集中する。教師養成においては、学校の種類の垂直区分に応じて、一方で小学校の、他方ではより高等な教育施設のための

教師を養成するシステムが幅を利かせるようになる。

小学校教師は受験予備校や小学校教員養成所で養成される。採用の条件は小学校あるいは中学校である。より高等な教育施設のための教師は大学を卒業せねばならない。そのためには、ギムナジウムの卒業試験に合格することが不可欠である。教員養成所では、すべての卒業生が体育授業のためにも養成される。より高等な教育施設での体育授業のために画一的な養成規定があるわけではない。

それぞれの連邦州は、それ自身の体育教師需要を満たすための可能性を生み出した。教員資格は、大学の課程、職能向上研修講習や私的な講習において取得されうる。これらの養成の内のひとつをとって、そのよし悪しを判断することはできない。必要な授業技術や教材の知識を伝えるような養成が重要である。このようにして、大学教育を受けた人、小学校教師、再兵役軍人、職人、商人そして体操家やスポーツマンが体育教師職に就く。

かなり多数の職人が皇帝時代に体育教師になった。そして政情の変化において、彼らはその人格や能力の土台をもとに、画一化された方法を通して今日の高等学校校長、教頭の地位に達した。取得した体育教員資格では、すべての種類の学校において専門体育教師としての雇用が可能であった。

次のような州で、20年代に州の体育施設で体育教師が養成される。

プロイセン（シュパンダウ） 1922年まで
9ヶ月間、その後12ヶ月間

バイエルン（ミュンヘン） 4学期と1年

バーデン（カールスルーエ） 4ヶ月間

ヴュテンベルグ（シュトゥットガルト）

6ヶ月間とケースバイケースで若干週増で
ザクセン（ドレスデン） 12ヶ月間

大学での養成は次のようである。

プロイセン、メークレンブルク、アンハルト・
ブラウンシュバイク 2学期=週に4年

後、後に4学期=週に2午後

ライプツィヒ 3学期=週に6時間

シエナ 2学期=590時間

ハンブルク 養成講座 1年=440時間
研究者講座 220時間

プロイセンでは私立講習会が許されている。

ベルリン

マグデブルク

ビーレフェルト

ドルトムント 等々 養成時間はシュパン
ダウの場合と同じ

すべてのいわゆる養成所において、確実に学校の身体教育に発展を与えるために、知識とともに勤勉、気配り、教育的責任と理想主義が学ばれた。このような養成から個人の教育の続行によって20年代においては体育に特色を与えるような男性と女性が現れる。すでに挙げられた人々の名前がすべて思い浮かぶ。彼らはまた体育教師養成の新しい、豊かなそして可能な限り統一のとれた構想を練りたいと思った人々である。

2) 体育教師養成の改革について (Zur Reform der Turnlehrausbildung)

小学校教師教育の改革に伴い、次第に増える大学教育化すなわちプロイセンにおける教員養成所の閉鎖や教育専門学校の設立に伴い、または総合大学（例えばハンブルク）における課程の開設や大学における体育のための研究所の設立に伴い、20年代の半ば以来、体育教師養成の刷新をめぐるアイデア豊かな、多岐な論争が起こる。

1911年からオーストリアにはすでに大学の体育教師養成がウィーン、インスブルックそしてグラーツにあった。その学生たちはそこで語学研究者としてふたつの、その内ひとつは科学的分野としての体育であることが許されているような主専攻を学ばねばならない。

1912年以来、バイエルンでは体育教師養成

が大学教育化される。ミュンヘンの州体育施設は大学に依拠している。体育の大学での勉強は専門教師の勉強であり、6学期かかり、1925年から8学期、そして語学の勉強すなわちその他の研究分野と同等に扱われる。従ってバイエルンはより高等な教職における学校の需要のために、体育-語学研究者として、初めての専門教師を養成する。

1925年には、ライプツィヒ大学が進歩的に突き進み、体育学のために助教授をおく。アルトロック（Altrock）教授はそこに現行の高等学校教職のための体育-語学の研究領域を創始する。

マールブルク大学はジェク（Jaeck）教授の任用をしてこの例に直ぐ続く。ハンブルクも同様にクノル（Knoll）教授のスポーツ医師任用をする。

それに伴って体育教育は大学の領域への最初の突進を成し遂げた。教育専門学校においてもである。そこでは、体育教育の大学教育化が同様に教授地位の獲得ということに繋がる。

帝国における州体育施設、その内のプロイセンのものは1924年以来単科大学の地位を得たのであるが、その他は没落を免れなかった。それらはすべての教師、大抵は小学校教師に、より高等な学校に勤務するための採用資格を与えるため専門の体育やスポーツの教師に養成するものである。1932年、遅くとも1933年に、このような養成所は終わりを迎える。

20年代の専門体育教師身あるいは体育-語学教師をめぐる論争は、体育教員資格をもち、そしてさらに別の主専攻をもった、つまり追加的な副専攻をもった語学教師に有利になるように決着する。体育教師養成の改革をめぐるこのような論争の際、カール・ディームによってベルリン-シャーロツテンブルクに設立されたドイツ体育大学は先駆的な役割を果たす。それは国家の支持を得た私的研究所として6学期で、後に8学期で教育学士、体育教師やスポーツ教師を養成する。後にギ

ムナジウム卒業試験が前提となる。このような教育学士は自由業における教師である。雇用資格を獲得するために、彼らは大抵ベルリンの大学でさらに別のふたつ目の教科あるいは医学を学ぶ。

学校における専門体育だけの資格の教師（教育学士）の教授資格についてのディームの闘争は無駄であった。また、プロイセン単科大学をベルリン大学に依拠しているドイツ単科大学と統合させようとする試みも、バイエルンの例と同じように成功しなかった。

1933年以後の体育教師養成の帝國的統一をめぐる新たに始められた論争の展開において、大学や教師教育施設で、あるいはベルリンの体育専門学校で行われる体育の大学教育に根本的な規制がかけられる。

終 章

20世紀初めの30年間に行われた身体文化や学校の身体教育における改革運動についても私たちは多くを報告することができる。体育は観念的に改革者たちの頭に浮かんでいた。

人間の自然は、人間存在の本質的的局面として再び発見される。それなしで精神的、心的生活は考えられない。身体、精神そして心は人間の姿の調和した全体性における有機的な機能とみられる。刺激、自然そして文化が、同じく人間同士がお互いに出会うことが、人間に影響を及ぼし、それらが個人を形成する。このような人類学的、心理学的そして医学的、生物学的考えは、身体教育にも大いに影響を及ぼす。

個々の人間の中の自然なものと文化的なものは、彼を囲む空間においてその人の感動、その人の動きやその人の行為のリズムの中に具体的に現れる。人間の運動空間は、彼自身の創造空間であり、文化空間である。体育の運動場も、芸術家のアトリエや職人の作業場のように、これに当たる。

身体文化あるいはまた心身文化は、人間の文化の本質的な局面である。それだからそれ

はその内容において，その価値を体験しうるようにせねばならない。体育の授業であるいは自由な運動法においても，人間はその身体性を十分な活動を通して感じるべきである。

体育における授業は 新しく方向を定める。それは変化しつつある器械運動によって，体操やダンス的生活要素によって，スポーツの競争の成績原理によって，民族的・スポーツ的遊戯によって影響を受け，コミュニケーションの最も感動的な方法のひとつとして自然の中を徒歩旅行することによって豊かにされる。

人間は内側から出て，外の世界で成熟するのもかもしれない。その外側が人の内側と一緒に特徴づける。「成長に委ねると導く」は教授法の原理になる。自由と拘束は教育における本質的目標である。価値感情や意義ある学びの意識を呼び覚ますこと，そして効果を知覚することが大事である。

つまり教授様式と学習様式の変化である。

学びつつあるものの本質に集中すること。教育とは，本質的なことを認識できることである。自発性，自己管理そして自己訓育を通して，ある教育水準に達すること。学校における具体的な生活，単に生活の準備のためにというだけでなく，人格形成や学校社会の形成のためにも。自己教育による性格教育。新しい教育は，人間の中の創造的力の活性化によって行われるべきである。

子どもからの原理 「子どもに生きさせよう」そして「子どもたちのために生きよう」

は，決定的に重要な教授学的，方法学的な原理である。

授業は生産的で，創造的で，あまり受動的でない方がよい。また瞑想的であるのがよい。そして意識の快活さを呼び覚ますように。授業は誠実であるのがよい。そして個々人を正義の普遍妥当性に高めるのがよい。授業は，個々人の若い生涯に影響を与える一編の話となるようなのがよい。¹⁷⁰⁾

学校における教育改革のこのような特徴

は，すでに指摘してきたように，改革の本質的な道標である。それらが，体育授業において，教育する者の「教育的愛」と「教育的性格」が創造的，効果的になりうるよう導いた。

原 注

151) Kindermann/Lilie, Körpererziehung in der Grundschule, Berlin 1929, S.9

152) 注151に同じ，S.10

153) 注151に同じ，S.17

154) 注151に同じ，S.23

155) Kade, Franz, Landschulreform, in: Die Volksschule, Jg. 1931, S.167

156) 注155に同じ，S.167/168

157) Breuer, H., Natürliches Geräteturnen in ländlichen Schulen, in: Die Volksschule, Jg. 1932, S.584/-586

158) Bier, August, in: Die Leibesübungen, Jg. 1926, S.91/92

159) Streicher, Margarete, in: Natürliches Turnen, 1. Teil, in: Hrsg. Schnell, Pädagogik der Gegenwart, Wien, 1971

160) Buchholz, H., Ziel und Wesen des orthopädischen Sondernturnens, in: Die Leibesübungen, Jg. 1925, S.150

161) すぐ前の引用番号がふられてないものもすべて Holz, Die Reichsjugendwettkämpfe in der Schule, in: Die Leibesübungen, Jg. 1926, S.460

162) Verweyen, J. M., Natürlichkeit, in: Die Leibesübungen, Jg. 1925, S.457

163) 注162に同じ，S.458

164) 注162に同じ，S.460

165) Kost, Helmut, Der Weg zur Nacktheit, in: Die Leibesübungen, Jg. 1925, S.470

166) 注165に同じ，S.476

167) Hagemann, Hedwig, Der unbedeckte Körper bei den Leibesübungen der Frau, in: Die Leibesübungen, Jg. 1925, S.474

168) 通達および告示 in: Die Leibesübungen, Jg. 1925, S.483

169) Neuendorff, Edmund, Gedanken über Turnkleidung und Seele, in: Die Leibes-

übungen, Jg. 1925, S.468
170) 注84に同じ, S.203-207

体育等関係者人名リスト

Breuer, Josef. 1842-1925. オーストリアの生理学者, 内科医。呼吸の神経系に対する関係の生理学および平衡感覚を研究した。フロイドに協力し, 共著『ヒステリー研究』1895. により精神分析学を確立した。

Diem, Carl. 1882-1962. ドイツの体育学者。1913年から33年までドイツ帝国体育委員会書記長を勤め, 20年にはドイツ体育大学を共同設立した。33年の同校解散まで副学長であった。38年から45年までベルリンの国際オリンピック協会会長, 第二次世界大戦後ケルンに体育大学を設立しその校長となる。50年から52年オリンピック委員会書記長を勤めた。彼は学校体育に関し, 体育授業を毎日設けることの法制化に尽くした。またベルリンの第15回オリンピックを組織した。主著には, 『人格と身体教育』1924-25, 『運動場建設』1927, 『スポーツの活動と理論』1949等がある。

Eckardt, Fritz. ドイツの体育家, ドレスデンの体育教師。体育改革の信念とその献身的努力は後世に大きな影響を及ぼした。彼は体育の体系, 体育の教材と方法を時代の新しい要請にそって築き上げようとした。この努力の結晶が『自然な運動形態を基礎にした体育授業』1908. である。入門書『体育』1917. によって改革思想をドイツに広げた。特にオーストリアの体育改革家ガウルホーファーとシュトライヒャーに大きな影響を与えた。『ヤーンの伝記』1924. も著す。

Galenos. 129-199. ギリシャの医学者, 解剖学者, 哲学者。ペルガモの人, スミルナ, コリント, アレクサンドリアで医学を修め, ローマに赴いたが, 盛名のために反対を招き, ローマを去った。やがて, マルクス・アウレリウス帝に迎えられ169年よりローマに定住した。数学, 文法, 哲学に通じ, 特に医学の方面では解剖と病理に詳しかった。医学の科学的基礎を築き, 精神科学のひとつとすることに努め, 種々の動物の屍体ならびに生体解剖による観察に従い人体の構造について断定を下した。ヒポクラテースを宗

としていたので, 体液病理説に服していたが, 諸種の学説に涉って研究し, 固形部分を全く除外していたわけではない。治病法には摂生と訓練に重きを置き, 「医者は自然の召使である」との言葉を残した。

Gaulhofer, Karl. 1885-1941. オーストリアの教育家, 体育学者。1903年グラーツ大学に入学。同年ベルリンの連邦体操祭でドイツ式五種競技で2位となる。1908年, 体育, 生物, 物理, 数学の教員試験に合格。1909年哲学博士号取得, 体育と生物の教師となる。1914年第一次世界大戦に応召。軍隊功労十字勲章を受ける。1919年文部省の体育担当官としてオーストリア体育改革に従事する。1922年シュトライヒャーとの共著『オーストリア学校体育概要』を著す。1928年体育学会を結成し, リーダーとして活躍する。1932年オランダのアムステルダム体育アカデミーの学長に就任する。

GutsMuths, Johann Christoph Friedrich. 1759-1839. 1786年, 汎愛教育運動の模範校であったシュネッペンタールの学校で身体教育重視の授業の主任になる。著書『青少年の体育』1793.

Hagemann, Hedwig. ベス・メンゼンディークやドーラ・メンツラーらとともに, 衛生学的, 生理学的, 教育的体操を主導した。

Harte, Erich. ドイツの体育家。ノイエンドルフとともにドイツの学校体育の改革に努力した。

Kindermann, Fredinand. 1740-1801. ドイツの教育家。産業学校の創始者といわれる。産業学校は, 貧民層の子どもを対象にして18世紀後半に設立され, 読書算の初歩のほか産業分野(織物業や農業など)の実際の労働技術を教える学校であった。職業準備教育の学校であると同時に, 子どもたちはそこでの自己の労働によって生活費と授業料をまかなうことが目指された点に特徴がある。キンダーマンは, ポヘミアの学校改革に取り組んだ。彼の思想と実践はさらにスイスのベスタロッチなどに継承される。19世紀に入り, 児童労働の制限を伴う一般的就学義務の導入により, 産業学校はその基盤を失った。

Kohlrausch, Ernst. 1850-1923. ドイツの医学者。国民および青年遊戯促進中央委員会の専門

委員長（1902-14）。体育運動，特にスポーツ医学的研究に従い，この方面の開拓者のひとり。主著に『体育物理学』1889.がある。

Martin, Rudolf. 1864-1925. ドイツの人類学者。チューリヒ大学助教授（1899），同教授（1905-11），ミュンヘン大学教授（17）として同人類学教室を主管した。従来の自然人類学の概念，資料を集大成した『人類学の教科書』1914.はこの方面の古典的教科書として知られている。第一次大戦後の国民体育の低下を憂え，講演や小冊子の発表によりその向上を訴え，多数の青少年の身体計測を行って新しい身体計測法の基準を定めた。

Neuendorff, Edmund. 1875-1961. ドイツの体育家，体育史家，体育学者。ベルリン市シュパンダウのプロイセン体育大学の初代学長。1921年からドイツ体操連盟青少年委員会の委員長。ヤーンから伝わる伝統的ドイツ体操と自然体操の統合を企てた。『近代ドイツ体育史』1930-32.

Otto, Berthold. 1859-1933. プロイセン政府の援助によってベルリンに家庭教師学校（ベルトールト・オッター学校）を1906年に開き，生涯そこで指導にあたった。彼の教育理論の内容は，当時のドイツの学校が外国語教授に偏っていたことに対する批判から説かれた母国語による教育，またそれによって初めて可能となる個性と自発性を原理とする子どもからの教育，それぞれの年齢段階に応じた子どもの言葉や話法の理解と活用，以上の内容を実現するための最上の教授形態としての総合授業（合科教授）に要約することができる。

Paulsen, Friedrich. 1846-1908. 哲学者および教育学者。思想家として時代の指針を提言し，影響力をもったが，教育学者としても近代的実科教育や実科諸学校の人文的ギムナジウムとの同権化に努めた。教育史の領域においても広範な資料研究に基づきつつ，学校の発達を文化史の中に位置づけ，それを資格認定制度，統一学校，

大学改革，民衆大学等の時事問題を通して展開し，その後のドイツの中等および高等教育に大きな影響を与えた。パウルゼンは教育を世代進行における文化的財の譲り渡しとして文化教育学的意味において理解している。

Rousseau, Jean-Jacques. 1712-1778. フランスの作家，思想家。長編小説『新エロイズ』1761.は自然への回帰による人間性，家族関係，恋愛感情，自然感情等の調和的回復を謳い，熱狂的な反響を呼び，教養小説的な構成をもつ教育論『エミール』1762.は，教育における人間の自然性回復の主張のもとに，封建的な古い社会的偏見と宗教的不寛容を批判した。

Schmidt, F. A. シュピース式の要素形式から脱却し，運動教材を生理学的運動効果によって価値判断しようとした。著書『身体的運動価値による体育』

Streicher, Margarethe. 1891-1985. オーストリアの女流体育家。ウィーン大学で博物学と体育を学び，1918年博物学の教員試験に合格，21年体育教員試験に合格。1914年よりウィーンのギムナジウムで体育教師として活動する一方ローエランド，ダルクローズ，メンゼンディーク等の新体操のコースにも積極的に参加した。1918年にウィーン大学体育教師養成課程の講師に就任，1919年よりガウルホ - ファーとの緊密な研究活動が始まる。ガウルホ - ファーに協力してオーストリアの体育改革に取り組む。自己活動等の新教育の理念を体育の領域において実現しようとする。教育学に強い関心をもち，ノールやシュブランガーにも師事し，教育全体における体育の正しい位置づけに努める。ガウルホ - ファーとの共著『児童の体育授業』1927-1935，『自然体育』5巻1930-1959，シュトライヒャー著『身体運動の教育的意義』1923，『自然運動について』1924，『学校体育』1928-1929.等が知られる。

